



「道徳的行為に関する体験的な学習」の指導方法を取り入れた実践例を紹介します。

第5学年 教材名「ペルーは泣いている」（「私たちの道徳」文部科学省）
内容項目：「国際理解、国際親善」（C-18）

価値観

様々な文化やそれに関わる事柄を互いに関連付けながら国際理解を深め、国際親善に努めようとする態度を育てることが重要である。また、日本人としての自覚や誇り、我が国の伝統と文化を理解し、尊重する態度を深めつつ、進んで他国の人々とつながり、交流活動を進めたりより親しくしたりしようとする国際親善の態度を養うようにする。

児童生徒観

この期の児童は、特に社会的認識能力が発達し、マスメディアに接することや社会科等で学習することによって、例えば、我が国と同様、他国にも国旗や国歌があり、相互に尊重すべきことなどを知る中で、他国への関心や理解が一層高まっていく。また、様々な学習において、他国の芸術や文化、他国の人々と接する機会も出てくる。

教材観

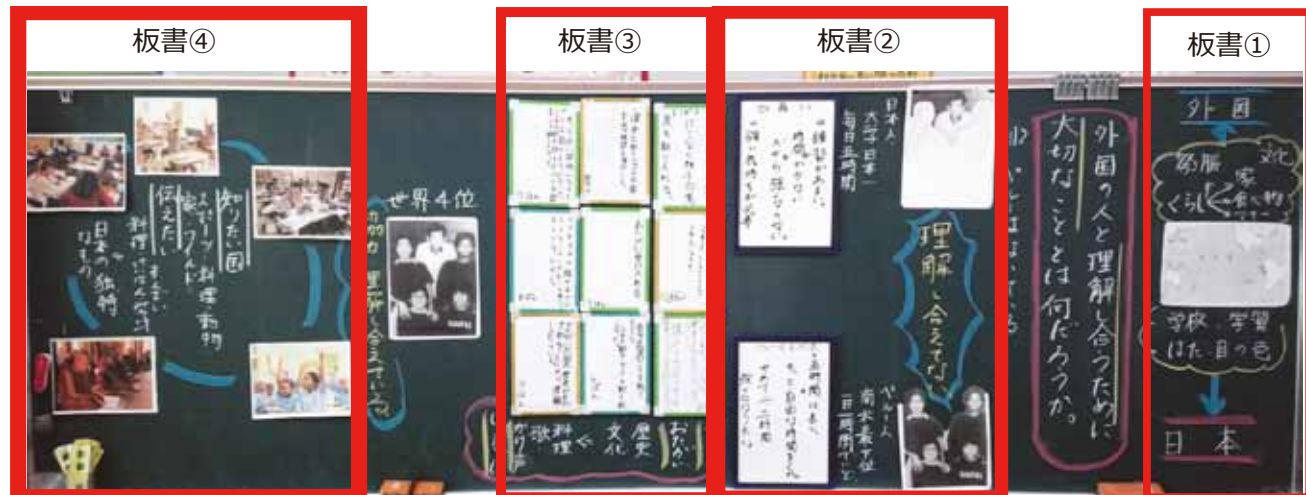
ペルー代表女子バレーボールチームと日本人監督の加藤明の歩みを基にした教材文である。外国の文化を理解し、国際親善に努めた明の姿から、外国の人や文化を大切に、日本人としての自覚をもって交流に努めようとする意欲を高めることができる教材である。

【主な流れ】

- 1 外国のことで知りたいことを出し合う。
(板書①)
- 2 めあてを立てる。
- 3 教材文の一読後、理解し合えない加藤と選手の立場に別れて役割演技を行う。
(板書②)
- 4 両者が理解し合えた過程を追究する。
(板書③)
- 5 外国の人と理解し合うよさを話し合う。
- 6 交流したい国とその理由、日本人として伝えたいこととその理由を一人一人が具体的に考える。
(板書④)
- 7 加藤明が終生ペルーに尽くし、英雄となったことを知る。

【指導のポイント】

- 指導方法の工夫
就任当初、ペルーの代表選手と理解し合えない監督の状況やその時の心情を共感的に理解させるために、グループごとに監督の立場と選手の立場になりきる役割演技の場を設定した。
- 中心発問について
導入段階で「外国の人と理解し合う必要はあるのか」と価値の必要性を問う。意見が分かれたらそのまま中心テーマとし、必要があり大勢であれば、「理解し合うために大切なこと」を中心テーマとする。本実践は後者となった。
中心テーマの話し合いはグループで行い、ホワイトボードにまとめて全体での交流を図った。



(平成28年度「道徳教育の充実に向けて（鹿児島県教育委員会作成）」実践事例から抜粋）

「特別の教科 道徳」（道徳科）に向けてⅡ

「考え、議論する道徳」へ

平成30年度から小学校で、平成31年度から中学校で、道徳の時間は、「特別の教科 道徳」（道徳科）として、新しい一歩を踏み出します。
道徳科では、子供たちがよりよく生きるために、答えが一つではない道徳的な課題を自分自身の問題として捉え、それに向き合いながら考え、判断し、行動・実践できる資質・能力を育む授業が求められます。このリーフレットで、「考え、議論する道徳」に向けた授業改善を図っていきましょう。

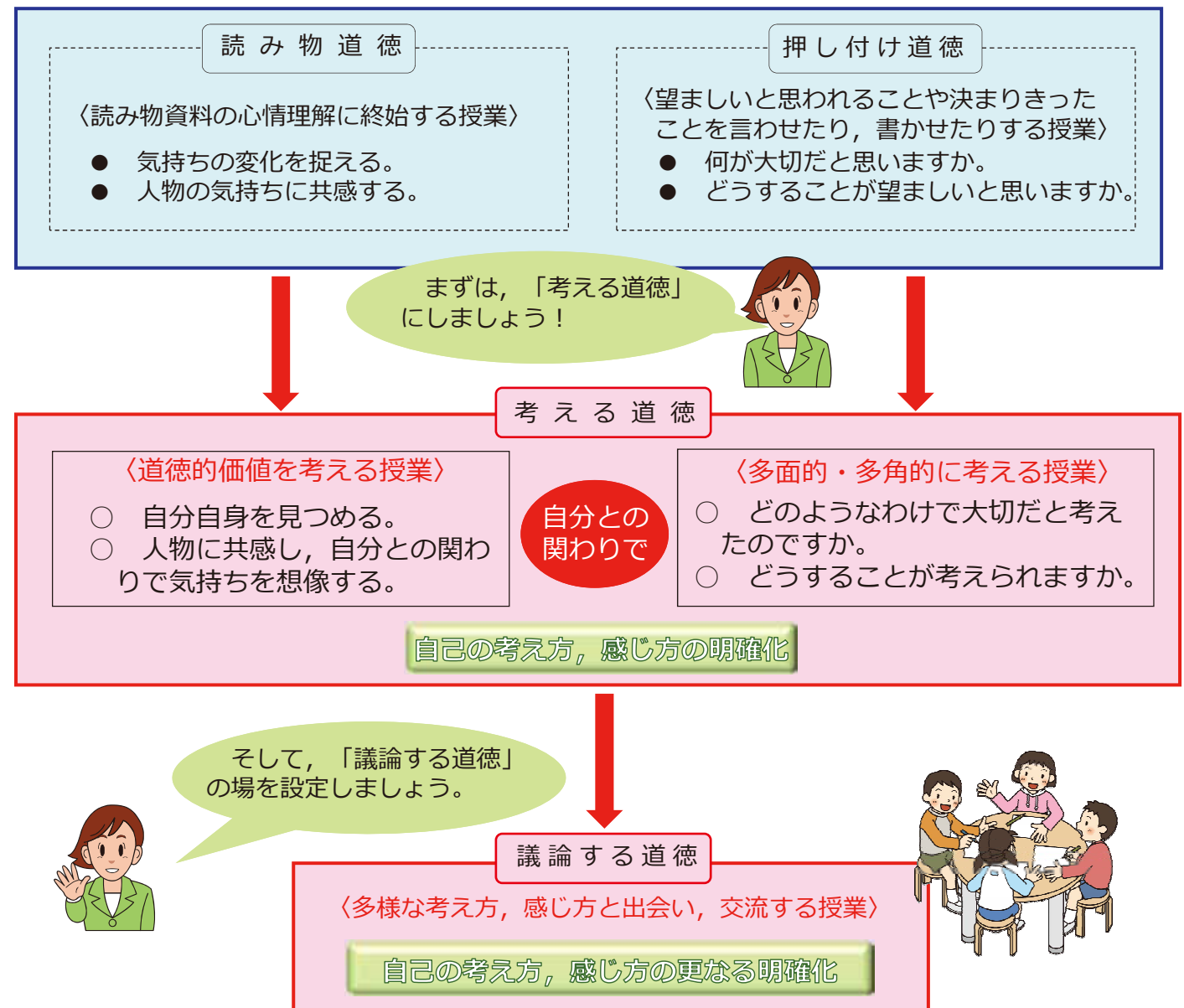
これまでの授業を振り返ってみましょう！



これまで、どのような授業を行っていましたか。



読み物道徳、押し付け道徳になっていたかもしれないな……。

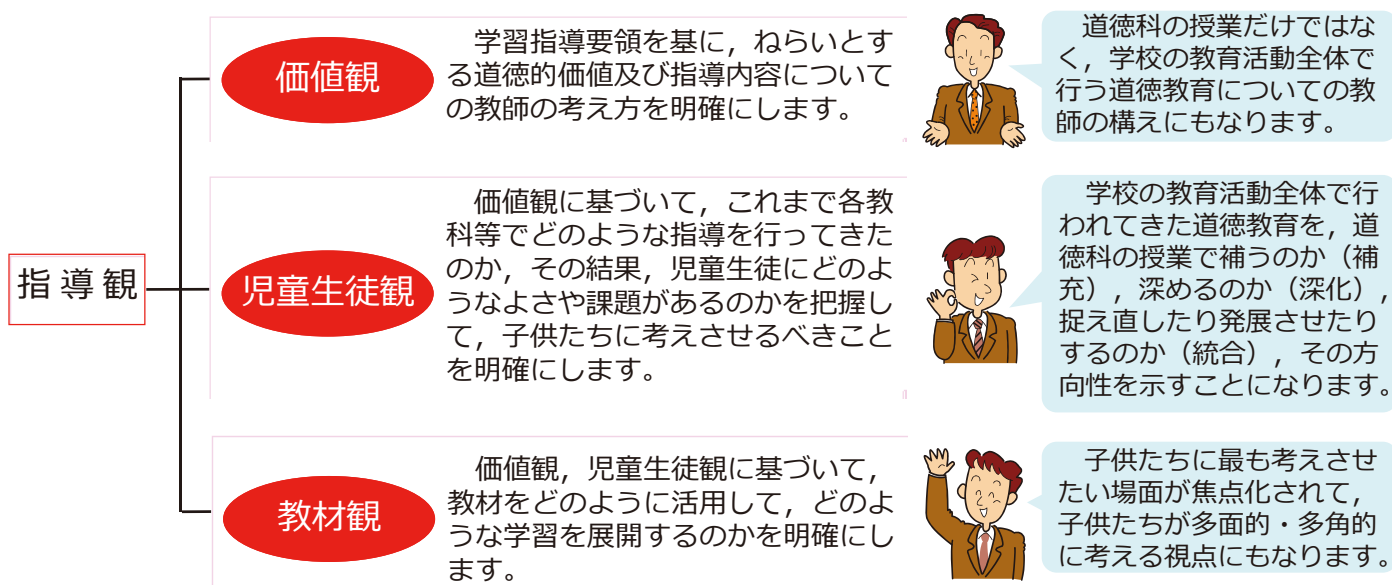


そして、「議論する道徳」の場を設定しましょう。



明確な指導観をもちましょう！

道徳科の役割は、各教科等における道徳教育としては取り扱う機会が十分でない内容項目に関わる指導を補うことや、子供や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深めること、内容項目の相互の関連を捉え直したり発展させたりすることです。このような役割を果たすためにも、教師が明確な指導観をもって指導に当たることが前提となります。



明確な指導観をもつことは、道徳科の授業で期待する子供たちの学びの姿が具体的になるので、子供たちの学習状況や道徳性の成長に係る様子を把握するための視点（評価の視点）にもなりますね。

指導観に基づいて、指導方法を工夫しましょう！

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（文部科学省）において、質の高い多様な指導方法として、三つの指導方法が例示されました。これは、それぞれが独立した指導の型を示しているわけではありません。明確な指導観に基づいて工夫・改良を加えながら、適切に選択したり、それぞれの要素を組み合わせたりすることが求められます。

① 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習【自分との関わりで考える学習】（例）



登場人物に自分を投影し、自分との関わりで、その判断や心情を考えたことで、道徳的価値を深めていくのですね。

【主な流れ】

- 1 道徳的価値に関する内容の提示
教師の話や発問を通して、本時に扱う道徳的価値へ方向付ける。
- 2 登場人物への自我関与
教材を読んで、登場人物の判断や心情について考えることを通して、自分との関わりで考える。
- 3 振り返り
本時の授業を振り返り、道徳的価値を自分との関係で捉えたり、それらを交流して自分の考えを深めたりする。
- 4 まとめ

【考え、議論する視点】

〔道徳的価値が実際に行為として実現したときの思いを考えさせる〕

- どうして主人公は、～という行動をとることができた（できなかった）のだろう。
- 主人公はどのような思いをもって～という判断をしたのだろう。

〔道徳的価値を自分との関わりで考えさせる〕

- 自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。

② 問題解決的な学習（例）



- 道徳的な問題について、なぜ問題になっているのか、よりよく解決するためにはどのような行動をとればいいのか、他にもよりよい解決策はないのかについて考え、議論させましょう。
- 問題場面に対する自分なりの解決策を選択・決定する中で、道徳的価値の意義や意味への理解を深めさせましょう。
- 考えた解決策を身近な問題に適用し、自分の考えを再考させましょう。

【主な流れ】

- 1 問題の発見や道徳的価値の想起等
教材や日常生活から道徳的な問題を見付ける。
- 2 問題の探究
発見した問題について、なぜ問題になっているのか、問題をよりよく解決するためにはどのような行動をとればよいのかなどについて、多面的・多角的に考え、議論を深める。
- 3 探究の解決
問題の探究を踏まえ、問題に対する自分なりの考えや解決方法を導き出す。
- 4 まとめ

【考え、議論する視点】

〔道徳的な問題状況を明らかにする〕

- 何が問題になっていますか。
- 何と何で迷っていますか。

〔考えの根拠を問う〕

- なぜ自分ならそう行動すると考えたのですか。

〔実際に自分に当てはめて考えてみることを促す〕

- 同じ場面に出会ったら、自分ならどう行動しますか。
- 自分にも同じような経験はなかったでしょうか。
- 自分がそうされてもいいですか。

〔道徳的価値の意味を考えさせる〕

- なぜ、□□（道徳的価値）は大切なのでしょうか。
- どうすれば、□□（道徳的価値）が実現できるのでしょうか。
- □□（道徳的価値）をしたらどうなると思いますか。
- いつ、どこで、誰にでもそうしますか。
- それでみんなが幸せになれるか。

③ 道徳的行為に関する体験的な学習（例）

- 役割演技など疑似体験的な表現活動を取り入れます。
- 単に体験的行為や活動そのものを目的とするのではなく、体験的行為などを通じて学んだ内容から道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにすることが大切です。



【主な流れ】

- 1 道徳的価値を実現する行為に関する問題場面の提示等
教材の中に含まれる道徳的価値に関わる葛藤場面を把握したり、日常生活で大切だと分かっているがなかなか実現できない場面を想起し、問題意識をもつ。
- 2 道徳的な問題場面の把握や考察
何が問題になっているのかを考え、道徳的価値を実践に移すためにはどんな心構えや態度が必要かを考える。
- 3 問題場面の役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動の実施
実際の問題場面を役割演技で再現し、登場人物の葛藤や、道徳的行為を体験し、その行為をすることの難しさなどを理解する。
- 4 道徳的価値の意味の考察
役割演技や道徳的行為を体験したり、その様子を見たりしたことを基に、多面的・多角的な視点から問題場面や取り得る行動について考える。
- 5 まとめ

【考え、議論する視点】

〔登場人物の葛藤を共感的に理解させる〕

- この場面では、何が問題なのだろう。
- 自分だったら、どうしますか。

〔取り得る行動を多面的・多角的に考える〕

- なぜ、～という行動ができたのだろう。

実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど具体的な道徳的行為をして、礼儀のよさや作法の難しさを考えたり、相手に思いやりのある言葉を掛けたりする工夫も考えられます。

